

ま え が き

指揮者はマンモン——

そうだ、天から墜ちた天使のうち

これほどさもしい根性の持主もなかったという、

あのマンモンであった。

——ミルトン『失樂園』——

2002年、パプアニューギニアでは独立してから6回目の総選挙が行われた。都市の貧困地帯でも、商店の店先に置かれたテレビの前には人だかりがして、開票結果に一喜一憂し、熱狂していた。その光景を横目に見ながら、イアリヴァは丘へ薪を取りに行く足をしばし止めた。「俺にもああした日があった」と中年を大きく踏み越したイアリヴァは一瞬、若き日の自分の姿を思い起こしていた。

あの頃はまだ若かった。世間で起こっている事にも好奇心で一杯だった。あの野郎が、イアリヴァの住む貧困集落にトラックで乗りつけてやって来たのもあの頃だった。奴は何十ダースものビールをトラックから降ろし、俺達に振る舞い、俺達にバラ色の人生を約束した。俺達は奴に一票を投じた。奴は目出度く当選し、俺達は奴の約束を心待ちにした。俺達は5年間待ち続けたが、奴の公約は何一つ実現しなかった。俺達の生活は相変わらず惨めなままだったが、野郎は議員の5年の間に一財産こさえたのだったわ。

イアリヴァは回想を打ち切ると、現実に戻った。いくつかの選挙が行われたが、俺達は未だに掘っ建て小屋に住み、職もなく、次の食事に取りつける所を求めてうろつき回っている。今日は食事に取りついた。明日もおそらく取りつけるだろう。だが、それから後はわからん。たぶん、これまで通り、

腹を満たすことはできまい。悪いことは、イアリヴァには負債がどっさりかぶさっていることだ。手間仕事が入らぬ時は、借金で食いつないでいく他なかった。初めは快く金を貸してくれていた親戚達も借金が降り積もってゆくにつれ、次第に断るようになっていった。次に金貸し屋から金を借りた。借金を踏み倒す度に殴られて、今は全身傷跡だらけで、打ち碎かれた右足を引きずって歩くようになった。つい最近も3度にわたって、彼の掘っ建て小屋はぶち壊された。もう地元の金貸し屋は金を貸してくれない。イアリヴァは見知らぬ集落を訪ねて、その金貸し屋から金を借り続けていった。だが、それも断られると残された道はもはや乞食をするか盗みをするしかない。

独立から27年が過ぎ、パプアニューギニアでは現在、絶対的貧困が急激に広がっている。一方では金貸し屋が現れ、国会議員に当選した者は在任期間中に巨大な富を築き上げることが出来る。社会には、一握りの勝者と今日一日生きることに精一杯の圧倒的多数の敗者が、その懸隔を大きく広げつつある。

こうした階級分化は、この国がまだ近代文明を知らず、新石器時代にあった数十年前には想像することもできないものであった。ごく少数の民族を除いては、戦士共同体である村の大人達は根本的に対等な者同士として向かい合っていたのである。イアリヴァの父祖もそうした誇り高い戦士達であった。

文化人類学においては、階級とは単に物質的・社会的現象を指すものではない。それは精神的現象でもあって、近代世界に投げ込まれた社会的敗者達が、白人に取って代わった勝者達に比して自らを「草の根」(グラス・ルーツ)と呼ぶようになった瞬間、階級は発生したのである。あらゆる男は生まれつき対等であるという誇り高き戦士エートスから次の食事でありつくことに精一杯の負け犬根性への変貌が階級発生という事態の精神的本質を成すのである。

本書は様々なヴァリエーションを示しながらも、共に新石器時代にあった太平洋の諸島嶼が近代世界に呑み込まれてゆく中で、どのように変貌して

いったのか、または不変性を維持していったのかを比較することによって、階級の根源に迫ろうとした試みである。

ベルリンの壁の崩壊とともにマルクス主義とその階級理論が「死んだ犬」扱いを受けた1989年以後、途上国のみならず、先進国においても階級分化は歯止めを失って進行しつつある。それは、単に物質的貧窮の問題ではなく、人間から尊厳を奪い、精神を荒廃させる点において正されねばならぬ病弊なのである。本書が無批判な物質主義の流れに対峙する一つの出発点となるなら、これに優る喜びはない。

2002年11月

編者